

寛永諸家譜

藤原氏士四冊之内二
為憲流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (111)		
函號	特	76	1



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





伊東

寛永諸家系圖傳

藤原氏

為憲流

伊東

十二

南家

淺草文庫

本ハ工坂と稱とのらあ〜こ〜
伊東と号と

大織冠十二代

● 為憲

從五位下 木工物

時理ときり

伊豆 駿河 甲斐 遠江等檢守
又之物の之乃字と者原此者乃字をわん
さくさくさくさく之者と号し

後五位下

遠江守

時信ときのぶ

後五位下

駿河守

工部大丞

維永いなが

伊豆國伊豆此庄一居位とこの檢
よさくさくさく伊豆と号し

後五位下

工部大丞

維宗いさね

駿河守

継職いせ

後五位下

伊豆工友いづのくさう

家継いせ

工友大吏

法名寂蓮ぶつな しやくれん

祐家すけい

祐親すけちか

伊東次郎入道いとうの じろう 入道

祐清すけひら

伊東九郎

祐泰すけやす

河津三郎かづの さんろう

祐成すけなり

常我十郎とこがの じゅうろう

律師リウシ

自殺ジコク

時致トキシ

書我五帝シヤガノイノ

祐繼ユヰ

工藤流クドウリウ

伊東次郎イトウジロウ

武者所ムカシノ

法名ホウナ運用ユウエイ

今按イマアタど流リウりリこコのノあアひヒがガ敷シ代ダイ官カン本ホン
のノ系ケイ属ゾクとト名ナ異イありアリとトしシとト也ヤ
志シらラ々々其キ家カ傳デンりリきキこコひヒとト
これコレをヲあアらラしシたタらラるルのノゆユりリ別ベツれレ
官カン本ホンをヲたタしシてテ記キしシてテ後コト流リウるル傳デンりリ

時理トキリ

時信トキシン

維永イエイ

維景

維藏

維次

家次

祐次

家傳了 継とす

祐家

祐經

工友一膳 在惠尉

法名弘河沙陀佛

日向園子能也

頼朝系 内乃とき家士十人と云

らび在清の尉五人 兵束尉五人 官

了はの 内所謂和回在惠の尉

義盛 小山在惠の尉 朝政之友在清の尉

祐經 古肥在惠の尉 遠平 梶原在惠の尉

系季 之浦 平六 兵束尉 義村 古屋

之郎兵束尉宗遠 字作美之郎兵束尉
祐茂 梶原之郎兵束尉 系宗 糟屋
友太 兵束尉 有房

祐茂

字作美之郎

祐長

伊東 隆摩守

祐光

伊東 八郎

祐時

之郎 童若大房丸 伊東 左束尉

俊子 位下大和守 法名 慈光

幕致 月星九耀子 兼介 ゆづら 祐光

あり

祐朝

次郎 のら左束尉と号す

祐光

八郎左衛門尉

從五位下

信濃守

法名道加

賴名

法名

祐宗

六郎左衛門尉

大和守

法名慈院

貞祐

六郎左衛門尉

安藝守

法名院觀

賴演

助法名

益豪

法名

維祐

信濃守

祐光

八郎左衛門

伊東右馬允ぐ元祐と寺ら系よ畠は河は子

たより守

祐持

六郎左衛門尉

信濃守

法名 照山光公

祐友

備前び前ま守し

祐将

左衛門尉

夢来

祐重

虎次丸

大和守

法名実山公

祐安

大和守

法名悦山公

氏祐

大和守

源為氏將軍より氏の字をたし

このゆへに祐をあらわすに氏祐

と号すと法名福彦祐公

祐亮

大和守

法名源健公

祐圓

大和守

法名笑山公

尹祐

大和守

源義尹將軍より尹乃字と云ふ
法名大用慈念

祐充

六郎

大和守

法名岳く摠と儀ぎ幸き

義祐

大膳大吏

法名車くるま翁おきな照眼てん

天文六年四月二日従四位下し叙しせ
らふに宣のたまわら

同十年八月二十七日大膳大吏し

任たとに宣のたまわらこのとき將軍源義尹
内書うちがきをた海うみ人ひと伴ばん務む守し之の如ごとし

同十五年三月之月之日し後のち之の位を叙しせ

ら内口室あり

義尹諱の字をたまふとき内書あり

伊勢守貞孝らび又晴元添物あり

義尹義祐とのりく相傳ありく之

らふらま内書をたはふ細川共部

大博者孝添物あり

義尹俊鷹とくりら内書あり

義祐も又鷹と義尹り祐とる事

之ゆびらり感懐の返簡之通あり

義益

後四位下 左京大夫

馬鷹と源義尹將軍も祐と内書あり

謝書二通をたはふ

永祿十三年七月十一日卒七歳二十

口法名棟名法光

義益死去のち方堺の城よりび

一族亦逆心を發しこのゆり子孫

日向國小汲藩

祐兵

豊後守 法名心園宗安

祐兵の代りしりく日向國之
部よりして五万七千石領地を領せ
文禄三年三月一日祐兵日本の統軍
将とになりし朝鮮國より海軍
の大將觀察使をうらとす

朝鮮番船ありしとき一番り
か友た馬物れをゆり二番り祐兵
番船二艘をゆりたり大り勝利を
ゆりて長三年より朝鮮
慶長四年正月十一日從五位下
叙せしれき後より叙せ
鴻津が家人伊集院源次高城の
とき

東照大権現寺次志摩守に命して

彼地より一ヶ月に及ぶ所

大権現御書と祐兵よたまのり降参せ

らるるのよきひくは志守と祐兵あひたり

征伐とまのむ秋あり御書に記し

先書の中伊集院源次郎よ今

ふ下城の中石角の御書に記し

寺志方下中なる自今

りる志方彼に候自今有御書

ら降果むる事細彼口と戸傍

とく候

八月廿日 家康御書判

伊集院源次郎

之後馬田甲斐守長政并伊兵部少輔忠政

と別く言上していしく秋兵あつたり

り忠政を上げます(ま)ちとせよ

大権現御書に記し遠くはに記して并伊

兵部少輔忠政よ上使して御書

書と一海ふることなり

今夜之方無必在通野作
方始付之九列在取殺やまお良
秋月高橋お談薩廣く働可波
戸可公妻細井伊兵戸お物一平は
之く禮

十月二日 家康沙由判

伊友老後書

休交

修理大吏

長四年の書

大権現塚別伏見向鴉了り海せ

とき井伊並政が奏考をり川く休交

らりく津舘しりり

同五年六月

大権現長尾系勝を証したまふ時井伊

並政より公に下野國白旗あり

休兵横山依た書を使者より一封の書

と重政りりさる

大権現の御為に川をさし忠告とらげり

てさしせぬさのさるさる重政せり

返書とさつりめ川をさし

とさしこの中を黒田如水豊前守

あり又祐兵書とめれとさるい

重政と返簡めこのさるい義兵

と國中に教とさしこのとき高橋

右進大丈元祐敵とさるい浪列大垣の

城りたてごさるいれ彼の内を待

城とせんと候志ありとさるい又

祐兵病にさる大坂ありと國中

ありあさしとこれゆは祐兵とさる

國りわさしとこれゆは如水、指

さこのとて國中ありあさしをい

くすみやう兵を教とさる

うみやうして如水、使をさ川守を

九月十八日向國中ありとさる

祐冬十二歳少て兵をいさひこれ
使を交川を監使し一回舟晦日交
崎の城をうこけん翌朝よりしりせめ
とて城を槍者平太忠射嫡子仲太忠尉
次男八右衛門尉父子二人よりしりこの
か士平等の首をとらふもの二百余人
なり祐冬とるより使をさして交川
にあひとく二人の首を如取つてとく
はそのより祐冬と交崎の城を海より

鶴津と合戦しすて翌年六月より
いしりてあひしりしりしりしり
なりなりこれゆへ祐冬が士卒戦死しり
色のおりしりしり元将大垣の城より
をいしりすてに降参しりしりしり

大権現交崎の城を元将よりしりしり
るまされ命あり祐兵此城をのそじり
ろしりあちとしりしり病しりしり十月
十一日卒しりしりしり高安より達せしり

してやまぬこれりてはるり
ま橋の城を元橋よりしるる

同七年四月十日秋冬後五位下み殿
これ修理たまひにむ口宣あり

名徳院敵沙朱戸をくくしるる

父が田地日向國之橋郡二万七千石餘を

孫飲と

將軍家の沙朱戸を又上より

寛永九年か有肥後守父子國四

のとき、た書のむ録をうけし海ら七月

又二日肥後國隈本の城をむじを

番と

同十三年四月日自卒と 法名春雲

玄興

祐久

後五位下 大和守

祐久十二歳のとき、あきく

了りて

名徳院殿の御湯

將軍家よりつとてまつ

徳久二十八歳れとま

將軍家れ 作をわりしり又徳久が遺跡

はく

寛永十四年肥後國天草郡よあし

名利支丹の邪徒蜂起りたまはれ郡

の番と川とむ

同十五年正月廿二日松平之挽物とま

り天草の城番をほとむ

同十七年

大樽現の御祭礼よりつとて梶井文門

地走れやくを川とむ

祐豊

自膳正

元和九年 祐豊十二歳ありて

京都了りてさしてまゝめく
名徳院殿を洋し〜ま川内
寛永元年十三果み〜江戸
に〜
名徳院殿及
將軍家了りて江戸に

祐次

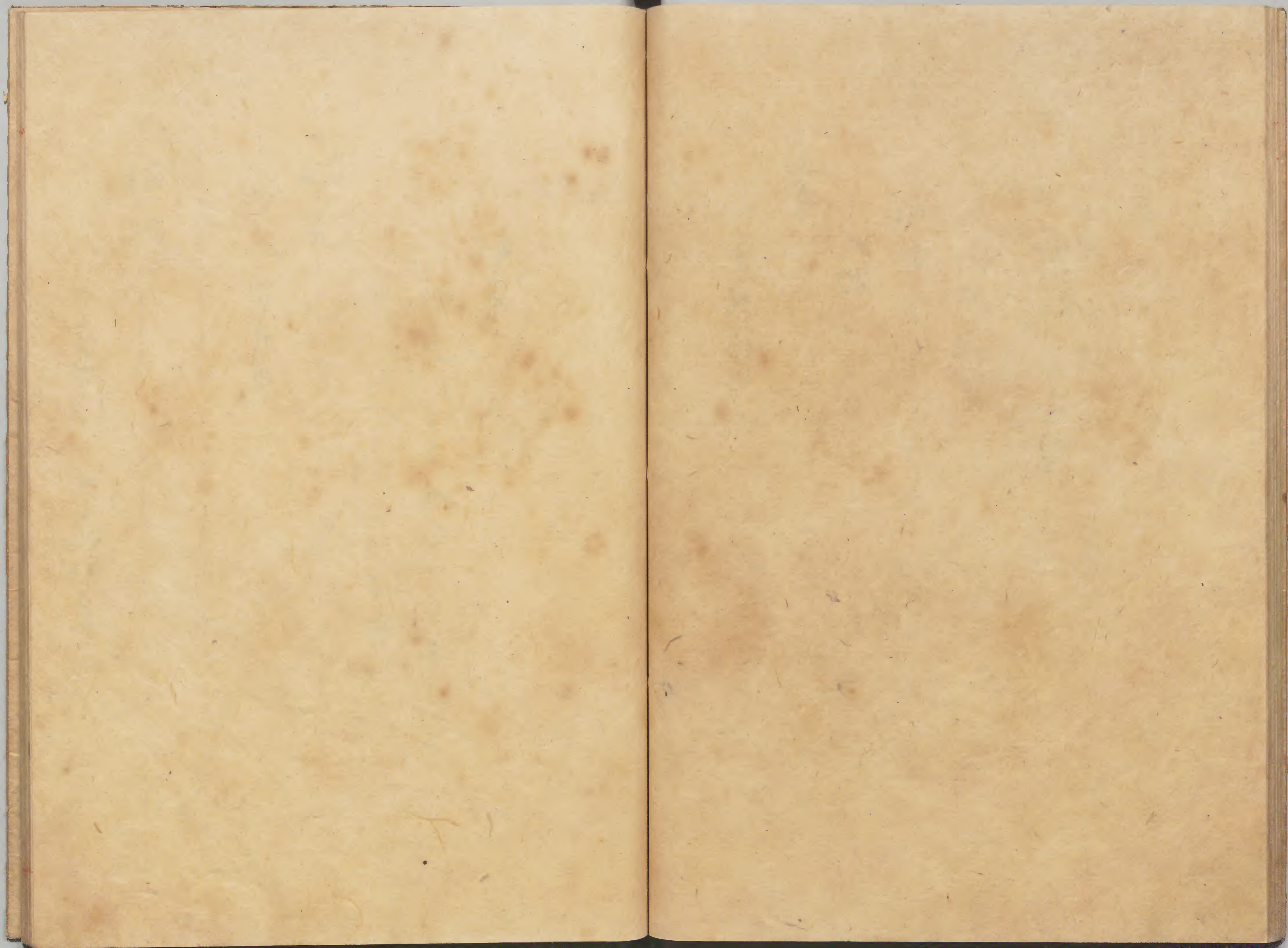
童名友松丸

後名京と号す

某

大胞

家紋 月九曜



伊東

祐光いとうは上大和守いとうが系けい場ばとなり

あつがゆへりこれを略りやくす

● 祐光

八郎はちろう左衛門ざえもんの

祐熙

八郎はちろう左衛門ざえもん 伊國いこく伊豆いず

祐春

八郎

祐茂

六郎 のち薩摩六郎と号す

中園前より出る

正平十三年 後村上の沙字に在道

将監より任じし

同十四年 掃部助に任じし 尚口官あり

助範

九郎 中園同前

正平十四年 後村上天皇掃部助 在道

将監より任じし 尚口官あり

資祐

掃部助 中園同前

正平十五年 安藝権守に任じし

口宣あり

祐堅すけけん

九郎 廿四回表

延永三年 飛人 必任 せしむ

家祐いえすけ

九郎 廿四回表

康正二年 細川 勝元 感書 をささづ

祐遠すけとほ

九郎 後伊弉守と号し 廿四回表

延仁年中 法体して 道安と号し

上枚 弾正 花渡 感状 をあへ

明應四年 二月 五日 小糸 宗瑞 感書

をささづ

祐範

九郎 十国回参

建仁二年九月十六日越河原
を以て戦死

時氏

修理進

兄祐範と同居しを以て討死

祐實

九郎 十国回参

長亨二年左衛門尉朝政感状を以て
同左衛門常春感状を以て

祐貞

右馬允 十国回参

天文七年小條氏綱感状を以て

祐尚

右の九 十四回

小條氏政よりつとむる力十之騎と

河川

天文七年晴氏感状と

元龜元年十月四日死と歳五十五

法名秀玉

政世

九郎之節 のらたる九と号と

豆別伊東氏に

小條氏政よりつとむる力十之騎鉄砲三十

之挺大筒之挺中筒二挺車筒一挺を河

川

永祿六年氏政諱の字をゆ

政世と号と

氏政小條安藤守とせしむるとき政世
群といひて先登とせしむるがゆへに
命をか給へしむるときは矢の如
く一制をせしむるこゝろとき
山縣に命をたしむるときは
戦場とせしむるなり
甲別武田勝頼を向の火きかたせ
りんめ政世よりびり山縣に
松田を束おたまなり
之は鴻天神

山城へいひてはむとせしむるときは
軍士とせしむるときは
それより巨物とせしむるときは
ちこれとせしむるときは
ともよとせしむるときは
さし甲兵と伏て敵口人なり
しにこれ場なり
國戸高橋がきつ橋
山縣をいひし松田の家

天正十八年秀吉小田原出陣のとき
氏直政世を討て氏政を討つ
ひ援兵とよこのとき城は西水と見え
せしむ者ハ小水八郎中村孫平次なり
これ取回十五回を討て政世を討て
ぬせしむる者ハ敵一人増ひぬ
とよみ家とよみ政世の弟ハ下山
久茂これをうちとるその増ひぬ
しむる者ハ火とよみ敵とよみ

志はしむるありて敵兵二百とよみ
ひしむるこれとき政世の力松平六茂
とよみの敵ハ人を討てぬとよみ
剣をぬきぬるものありて仁直
孫六郎を討て志はしむる鉄砲をぬ
たしむる者ハ敵兵とよみ見敵水と
氏政松平仁直の軍忠を感て矢百筋
ありてハ平十儀を松平ありてハ平
十儀を仁直ありて

文禄二年のころ

東照大権現より神湯へ

長五年国原陣のとき 嚴命を

かゝり

右徳院敵より供養をせしめし

事行

同十九年大坂沙陣のとき

作より政世より安後次

永回言た事本沙徳奉行

同年大坂鴨陣のとき

嚴命をかりゆり政世より

安後次大連の本より

普徳を新にせしめ

十一月二十五日城中

より豆物を出し鉄砲を

射し川へ政世お儀

安後よりいひくすみや

て事をしし普徳の切を

るきりり二人がいり
と意をう
かかんめはあつこいゆり
あ條い海
ふ水せが向とるり
政世純をひ川
さげひとるも満とるこ
のときを代
が家人山本五右衛門といふ
まの政世が
勇敢のこゝろを感
じまていひま
がらんといふこゝろに
まじりて敵陣
みんせむふりて
敵敗走して柵
のうちよりぬこのゆり
普徳の功を

らげますとて
又日言りて

名徳院殿の魔下り
ゆりて

の趣を言上り
て高とこ
ゆり折
本多依彦守
沙茶み作
てい
政世より取は
るに埋
ちこ
ゆり

名徳院殿 釣命
とて

向後り
ゆりの事
あ
力をけり
忠をぬ
んで
ゆあ
ひ
り
り
付
て
れ

その翌二十六日敵又足師數多を
一鉄砲をえお川うまをひて政世
らびり屋代安番それ心を一あして
自馬をすめくこれをふこれ
いもく士率又柵の中りあけ
から向けり政世又属る浪人安西
金兵束といふ者柵の本をぬやち
敵兵の川下の鉄をうまひちあ
くくを鉄をの川く敵兵を川き

士率をひちち令兵束いまは松平
と作守並久がもたあち

大坂の城搦をうひつと政世をひ
り安番次右衛門永田若左衛門山田若左衛門
身行れ候をうけへ後らちの終
のち

名徳院敵それ骨を感し山
よして口人をうし沙登道り
沙茶をいもふそあち水口よまいて

又黄令きわをよび沙羽織さう沙服さふくを并ならべ
元和元年大畑再陣おほのとき永田普磨
墨角すみかく縫敵物ぬい垣かきた勅しつ古惠ふるゑをよび政世
作つくをかりし法はふ法はふを行なし川がはを此時
政世せいせいが川がはに敵兵てきへいとくつし高名たかを
よび政世せいせいが家人けにん等ら首級しゆけいをぬら田中
自敵物このこのもの川がはに長なが之節のふしおきくは揚あり
よして高名たかけり政世せいせい田中川のよ言
をあらす

沙羽陣さうじんの役軍切えきぐみきりの評ひら成なりあり此時田中
川がはに御前ごぜんよりよして政世せいせいをりて能人
とすこよよして 釣命つひなよりいしく
田中川のに政世せいせいを〜〜〜能よくはらとす
彼かい〜〜〜虚言きよごありんやとなす
沙合戦さあせの役永田ながよりよび政世せいせい 信のぶをけ
らまら軍中ぐんちゆう首かみあり〜〜〜これ帳ちやうを約やくと
しる

寛永五年死と歳七十二

空玄

猛倉少院了

祐信

新八郎

相州之場を以て討死

弘祐

長兵衛

世國相掾

小條氏政よりび又安房守より
小姓とる侍そのち与力十騎
をよび置物二十人をあつら
天正十年六月上野國神名川
乃合戦よりして首級をぬら
同十一年十月沼田合戦よりして
先登とるりくちせめがら矢麻を
つら

同十九年正月より

大権現より祓禊しつて戸川内
文禄元年名護屋陣より供養を
これとき弘祐よりいふ長山又六郎
作をかりしり肥後山よりいいて涉
府船をけり舟を行とる
慶長元年 嚴命よりしり
名徳院殿よりつてつて戸川内
同五年又大涉番乃継列して
美田陣に供養を

同十九年大坂陣の時

名徳院殿の 釣命をかりしり弘祐より
ひり神若七郎山角又長束等
の三人涉旗本中甲をり此をさ
とる時
元和元年大坂陣の時
釣命をかりしり弘祐よりいふ小將
次郎七郎神若七郎又川内
山角又長束青木又長束等

伊藤中宗命のり鉄炮奉行
とあり

一戦乃ち弘祐の家人根原中重
といふ若首級をえり

元和九年

將軍家より津之うぐす川口大津

番の繼り列と

寛永四年九月廿日死と歳六十

法名文忠

結次

肥之節

天正十九年

大権現了了了了了了了

祐久

九郎左衛門 廿四上野

慶長十年八月

台徳院敵り洋湯一帯内

同十一年大沙番此繼り列と

同十九年大坂沙陣乃とき高木水正

か繼り属して江戸沙城此番とつと

元和元年大坂再陣乃とき高木

高木か繼り属して供奉と

同九年

將軍家より此へ〜〜川口

大沙番を川と

祐吉

源右衛門 中園武苑

寛長十五年

台徳院敵り此へ〜〜

將軍家より〜川

祐信

七右衛門

寛永九年

果

將軍家よりつゝく月川

長五郎

本國伊豆

將軍家よりつゝくそまつ

果

梶助

生國武苑

將軍家よりつゝく月川

祐友

甚五兵衛

生國武苑

寛永十三年

將軍家よりつゝく月川

時

五郎左衛門

台徳院殿

將軍家より勤仕くくつ

寛永十二年七月十六日死す威仁十二

法名玄長

政勝

右馬允

長十年政勝十歳死す

めく

台徳院敵を洋く奪

元和元年大坂陣より供

寛永元年

將軍家よりつく

政次

虎之助

廿四歳

將軍家よりつく

政次家紋丸の内一文字

政勝幕紋

木丸

薩摩六郎一文字とあり

祐久家紋

木丸

一文字

祐右幕紋

同右

祐信家紋

同前

祐友幕紋

同右

指助家紋

丸の内一文字

● 長久

伊東

七菴 生圃尾張

秀吉ひでゆき 秀吉ひでゆき 一いつ 氏うぢ

天正てんせい 十一年じゅういちねん 秀吉ひでゆき と 柴田しばた 勝家かつや 也なり

小圃こく 了りょう 一いつ 氏うぢ 秀吉ひでゆき 也なり

属しゆ 一いつ 陣じん 中ちゆう 一いつ 氏うぢ 秀吉ひでゆき 也なり

五十三歳にして死す

法名 吾志

長次

従五位下 丹後守 廿四回安

法禪して宗徳と号す

秀吉をよび秀頼をつと

元和元年大坂落城の後めりて

東照大権現に祈禱す

名徳院殿より此へてまじりて

家地を領す侍奉大坂ありあり

しる

寛永六年七十歳にして卒す

長昌

従五位下 若狭守 廿四回安

長昌十六歳のとき駿府よりをひて

大権現につとて川内

そのち長昌が兄甚吉死す侍より

作をひらきし秀頼より属せ
元和元年大坂落城の後父長次と
おなじくめされし

大樽規

台徳院敵よつとくつ川を此後
將軍家より侍之あくる海つ

寛永十七年江戸よりひく字十八歳
あつて卒せし 法名高天

長行

也左衛門 中園山城

外祖父長次が養子とれりとま

六歳実ハ堀田が候守盛正の子なり

盛正中園尾張從五位下より叙せ卒

歳ありて卒せし父長正從五位下

書書次尾列より卒六十之歳

して卒せし 家の紋豎来凡

寛永二年長行八歳より

將軍家に祿賜^{五ノ}也

同十年^{五ノ}三月^{五ノ}つゝ^{五ノ}く^{五ノ}ま^{五ノ}り^{五ノ}沙^{五ノ}院^{五ノ}
番^{五ノ}子^{五ノ}川^{五ノ}志^{五ノ}

長治^{五ノ}

是^{五ノ}太郎^{五ノ} 廿四^{五ノ}武^{五ノ}苑^{五ノ}

將軍家^{五ノ}より^{五ノ}つゝ^{五ノ}く^{五ノ}ま^{五ノ}り^{五ノ}

家^{五ノ}紋^{五ノ} 折^{五ノ}入^{五ノ}著^{五ノ}

